

(永正三年) 此年、冬雪不降。暖ナル事先代ニモ加様  
成事無之。湖モ不氷。

(永正五年) 大雨頻ニ而、作毛言語同断悪シ。

(永正七年) 去年極月廿五日ヨリ大雪降、深サ四尺。  
鹿死事云ニ不及。

(永正八年) 此年大風二三度吹テ、十分ノ富貴四分三  
分ニ成ル。国々大水八月出テ耕作損事無限。言語  
同断也。

(永正九年) 三月十八十九日雪両日降積事四尺。通路  
悉トマル。

(永正十一年) 世間暖ナル事申不及。霜月、輝月、雪  
不降。冬中一二度降レトモ、一寸二寸ヨリ厚ハ不  
降。

(永正十二年) 此年八十月十二日ノ夜ヨリ雪日大雨ト  
雪ト同心ニ降ニ依テ、大地殊ノ外ニ氷テ、芋モホ  
リエス。菜ナトモ一本モ取ル間モ無シ。サシ置ニ  
依テ菜モ徒ラニスル。芋モ如此致候間、中々言  
語道断、飢饉ト成也。地下ノ歎ノ事無申許。此年  
ハ耕作田島粟稗惣テ造ル程ノ物ハ何も悪シ。飢饉  
ス。寒事前々ニモ過タリ。

(永正十四年) 此年、極月十五日ヨリ三日雨ニテ、前  
後雪降積リ、己上四尺五寸降ル。鳥獸自喰物ナキ  
ニ依テ皆々餓死ス。言語道断、深雪ニテ四方路次、  
悉フサカル。

(永正十五年) 此年七月十三日大風吹テ作毛悉損ス。  
諸作悪シ。其年ノ八月廿六日夜大霜降テ、明日日  
迄キエス。世間ツマル事無限。

この抜書によると永正三年と永正十一年とは暖冬で、  
富士五湖も結氷しなかったようで、諏訪湖も明海であ  
ったと思われるが、その他の年が異常暖冬であったと思  
えないのである。

#### 4. 天文四、五年の記事について

天文四、五年についても“当社神幸記”と“妙法寺  
記”の記事にちがいがあ。 “妙法寺記”によれば、

(天文四年) 此年正月ヨリ暄(暖と同義)気ニ御座候。

(天文五年) 此年正月暖気ニ御座候。

(天文六年) 此年正月暄(暖と同義)ニ候。

とある。しかるに“神幸記”にあつては、天文四年十一  
月十七日(1935年12月21日)諏訪湖結氷、同十九日(12  
月23日)御神渡があつたとして、天正四/五年の冬は寒か  
つたように受取られ、また天文五年十二月十五日(1536  
年2月5日)諏訪湖結氷、同十八日(2月8日)御神渡  
があつたとしていて、天文五/六年の冬が暖かだつたよ  
うに受取られるのである。

注記するが、16世紀における諏訪湖の結氷日の平均は  
1月7.8日である。

因みに“当社神幸記”や“妙法寺記”によると、冬と  
いう記事が、その年の正月ごろの冬であるのか、または  
その年の12月ごろの冬であるのか、判断できない年もあ  
る。

#### 5. むすび

16世紀はいろいろの沢山の史料から寒かつたように思  
われる。従来、諏訪湖が永正4年から永正12年まで明海  
がつづいたという“当社神幸記”の記述(実は御神渡が  
なかつたと簡単に略記してあるにとどまる)や、寒暖の  
指標になるかどうか怪しい年輪解析をもとにして、16世  
紀は暖かだつたと主張している人々がある。然し、この史  
料そのものが不確かなのであつて、それだけを根拠とし  
て16世紀全体が暖かであつたと結論するのは早計である  
と思われるのである。むしろ他の多くの史料から16世紀  
はいわゆる小氷河期(little ice age)の走りにあたり、  
寒かつたとした方がよいと思われるのである。

551.509.9:551.596.1

## 汽車の音がすると雨になる\*

吉 持 昭\*\*

岡田の気象学<sup>1)</sup>に「鐘声の判きり聞えるのは雨の兆」  
というり言がみえ、ほかにも、遠くのもの音がはつきり  
聞こえると雨とか晴れとかいっている。すなわち、北海

道<sup>2)</sup>では「波音の近きは晴(寿都・久遠)、風(亀田・増  
毛)、雨(室蘭)」「物音近く聞ゆるは雨(岩内)」があり、  
愛知県<sup>3)</sup>では「西方の河瀬の能く聞ゆるは晴天なり  
(円羽郡)」「秋、川の瀬の鳴るは翌日快晴なり(宝飯  
郡)」「小春日に鐘近く聞ゆるは天気変ると云う」「庄内  
川の瀬音高く聞ゆるときは雨なり(東春井郡)」がみえ、  
飛騨高山<sup>4)</sup>では「寺の鐘の鳴りがよいと天気兆」、陸

\* If you Hear the Roar of the Train, it will  
Rain.

\*\* Akira Yoshimochi 広島地方気象台  
—1962年12月13日受理—

中<sup>5)</sup>の「沖の波音近きは雨の兆」「川瀬の音が川下から聞えると雨」というのがある。

さて、藤原咲平<sup>6)</sup>の集めた「気笛の音の大きいのは雨近し(和歌山)」と同じような「汽車の音がすると雨になる」というものが、広島県賀茂郡の一地方にあるので報告する。

広島県賀茂郡に住む当年55才になる農業主婦の方から手紙をもらい、表題にあるようないい伝えを教えられた。地図から住所を調べてみると、国鉄の線路に一番近い直距離は、山陽本線本郷、河内駅の中ほどから5~6kmの谷間であった。

この手紙には、関連して笑話が付いてある。第2次大戦中、食糧増産について「汽車の音が聞こえたら雨が近いから、イモズル(さつまいもの苗)を切って植えるように」という講演があった。さて、あるおじいさんが汽車に乗ろうと駅のプラットホームで待っていると「ありゃ、汽車の音がしたんけん、早うイモズルを植えにゃー」といった。

このあたりに鉄道が敷かれたのを調べてみると、1892年(明治25年)7月に山陽鉄道株式会社の山陽鉄道が糸崎まで付き、広島まで開通したのは1894年6月というから、第2次大戦までの約50年ぐらゐの間にこのいい

伝えが生まれたことになる。

いわゆる文明開化してからできたいい伝えに「三人で写真を撮ると真ん中のものが死ぬ」というのがあり、文部省の迷信調査では北海道から九州まで、全国的なものという、これは汽車の音と性質が全く違うが、ことわざ発生からきょう味がある。気象学のほかに歴史学、民俗学、人類学、社会学、言語学、地理学、宗教学、心理学などの知識を総合して研究しなければならない問題である。

#### 参考文献

- 1) 岡田武松(1935): 気象学, 岩波書店, 第1版, 下巻, 202~212.
- 2) 北海道庁第2部地理課(1890): 北海道俚諺天気予考, 北海道庁発行, p. 59., 67.
- 3) 愛知県名古屋測候所(1901): 尾三気象俚諺, 14~15, 34~35 [1961年, 中部電力K. K. 給電部系統技術課の復版による]
- 4) 高山測候所(1924): 飛驒の天気俚諺, 気象集誌, 2nd, 2, 252~253.
- 5) 田口克敏(1959): 気象のことわざ, 財団法人関西気象協会発行, 117~119.
- 6) 藤原咲平(1961): 天気俚諺集, 気象庁研修所発行通信教育部テキスト第11分冊, 天気予報と暴風警報, 気象学概論付録, 61~77.

#### 〔新書紹介〕

大気の謎をとく O・G・サットン著 村山信彦訳  
B 6版 254頁 白揚社発行 定価 480円

微気象や拡散問題の大家として知られているイギリス気象局長のO・G・サットンが、一般教養のための気象学書として、1961年にあらわした“The Challenge of the Atmosphere”の完訳である。

第1章の「気候と天気」では、地球全体の熱エネルギーの収支をあつかい、第2章以下への導入部分になっている。第2章は大循環がテーマで、大気力学の法則が述べられ、熱学に関係のある法則は、第3章の「雲と雨の物理」で説明されている。ここでは、人工降雨についても、かなりのページがさかされている。

第4章は高低気圧規模の現象で、絶対零度の保存則が中心になり、予報の経験則が力学理論によりどのように裏付けられるかが述べられる。ハリケーン、トルネード、雷雨が次の章であるが、現象のスケールからみて、ハリケーンは高低気圧のほうに含めるのが適当ではなからうか。危険半円が進行方向の右側でなく、北側の半分になっている図は適当でない。半径1kmの雷雲の全エネルギーが、第二次大戦中に日本に落された原爆の10倍もあるという説明は興味深い。

さらに小さい規模の現象として、第6章に乱流理論の

歴史的発展とその意義が、第7章にその応用がとりあげられる。ラグランジュ相関と「よっぱらいの歩き方」のアナロジーはおもしろく、乱流理論の実用性を「気象学の人類福祉のためにはたす偉大な貢献の一つは、大気中の不必要な物質を除去する方法を、しっかりした物理的基礎に立って解決すること」としているのは、著者の微気象に対する端的な評価である。

第8章は「天気予報の進歩」で、予報の限界や適中率の意味、長期予報の基礎としての周期や類似性、数値予報の発展とテクニクについて述べている。

この種の啓蒙書はすくない。しかし、現在の気象学の中心問題を、大気現象のスケールを横軸とし、エネルギーの原理を縦軸として位置づけしようとする著者の着眼点には新鮮さがあり、しかもその意図はかなり成功しているように思う。気象学を羅列的・横断的に修得した人々が、もう一度著者の立場で見なおすことは大変意味のあることで、また、気象技術の実際に従事する人達が、その技術分野の位置づけをはっきりさせるためにも、本書の一読はプラスするところが多いにちがいない。

訳は、原文えの忠実さを第一としているため、すらすら読みとおしにくいところも見うけられるが、他の教科書などを一応読んだ人なら、困難なく理解できると思う。本書の中に日本の資料を織りこめば、ユニークな気象学入門書となるにちがいない。(篠原武次)